

昭和十七年

(五十八)

合掌 その後、如何に候や、小生の快復も至極遅々なれども、血圧一三六なれば御安心下され度候。げに生死の大海は有漏の業風鼓扇して定まらず、数日前より増田きさよ持病をおこした。左膝はれ上りたるがもとにて、一時は発熱四十度近く、嘔吐つき、下痢おこり、脳症をおこし、時にはわめき泣き叫び、昨十六日は五〇〇松中氏注入等、そこへ「母病い、すぐ来い」と松中氏に電報、十七日朝大野に帰り候。それ以来依然として病状はかばかしからず、食欲は幾分出たるも下痢やまず、右目失明、日々衰弱加わり居り候。軽き脳症と声の変調にて、全く第二人格を出現致候、時々大声を発し候。実に生死の大海の業風波浪はてしなく、幾度にも書き候。二十日朝、昨夜よりプルス悪く候、今より又リンゲルの注入に候

これを如何ともなし難く候。大悲、本願のみ、身にしむことに御座候。

東京は、或夜、私の側に来り、せつかく広島に來りながら一席の法も聞かれずとて落涙致し候故、その次の夜、彼が為に席を設けてお話致し候ことに候、その夜の話はつまり、

一、墮落の生は死なり、向上の死は生なり、ということにて、論主の建章、及び大師の二河誓の意にて候。三定死に立てる行者は、ゆくも死なるに、本願の道に死ぬことを得たる人にて候、生きんことを求めて墮落を知らず、故に死にて候、本願の道を認めて死する心、横超にて候、自力の死、絶対の生のところのみ二尊まします、人は死処を見出す迄の流転にて候。救命自我を殺し、大我を生かしたまうことに候。鸞師は論主の世尊とよびたまうことを釈して、知恩報徳と乞加神力とを挙げたまいぬ、蓋しこの二者は上向の生、白道上の永遠の生の現相に外ならず候。一等等、その夜は少人数なれども有難きことに候いき。更に東京は市内の同胞の集り第二回にも列席致して帰り候。

騒動は病気には悪く候。静かになりて心疲れず、三晩ほど安眠を得候ところ、エスバハ氏定量に付、〇・二か〇・三位に下り候。これは朝一番の分、日中の午後の方は、極めて称薄微量に候間、御安心下され度候。さりながら、生も死も、ただ念仏の中に死にきつてのことに御座候。快くなりし体もいづれは五陰仮和合のものに候。この書、鶴枝どのにもよませ下され度候。此間は御芳志有難く候早々。子供らによい子だと頭をなでて御伝え被下度候。

昭和十七年三月二十日

夜晃

蘇晃殿

二十一日 追伸 毎日津田氏に問て「外科に見せなくてもいいでしょうか。」「膿がないようですから、まあ、もう一日様子を見ましよう。」で一昨夜(十九日)より脈悪化。二十日津田氏云く、「強心剤より外ないです。」と。しかしここに至つて何とか術

はないか、義彦君と議し、更に津田に電話して、日下部を呼ぶ。午後九時頃来診、博士云く（見ぬ内から）慢性敗血症。左膝関節の手当て指示、其他指示。噫、何故に最初の日に外科に渡さざりしか、千載の痛恨事。それより三十分おき注射。リンゲルはもちろんのこと、二十一日朝、日下部外科切開、膿少量。意識言語不明瞭なるも「きさよさん、先生だよ。わかるか。」「ハイ」唇動き念仏す。既に絶望の様子なり。内科に誠意なければ、素人に劣る。

（五十九）

合掌 再度の御便有難く拝見致しました。母上の御容態定まらず御心配の御ことです。増田さんの様子は悪化一方のようです。もうあの大きな声もあまり出ずスヤスヤ昏睡している様です。プルスも百二三十も打っているようです。因縁の悪い子です。あれほど力にした貴女にもゆかれてしまい、尊かるべき病床も脳症によつて破られ、前世の業因、誠にのがれ難し。御聖教のみ言通りです。嬢等は元氣です。注射は増田さんも義彦君がしています。次に小生の症状は、本部が静かになつて安眠がとれるようになるや急に下つて、十九日と二十日は、○、三から○、二位になりました。貴女がいた時の半分位でしょうか。昼の分はズルホで見れば極めて少量です。夜十時半頃から朝六時半頃まで八時間も時間があつての尿で○、○二位です。御喜び下さい。

早く帰つて来い！ 早く帰つて来い。母上の御病気を早くよくして一日も早く来つてこい。何時も何時も待ちつづけています。増田きさよが悪いにつけてこの念いよいよ切々たり。あるいはこの度が最後ではないかと思われるにつけては、せめて貴女がいてやつてくれたらと思われてならない。今の様子では入院等と動かすことも出来ないでしょう。今日はまだ津田先生も来られず何とも言えぬことではあるが。木村のお婆様の一番の愛息徳一君の戦死の報あり。本部にも来り、御法も聞いた人であつたが、お婆様の御心御察し致し、何とも言ふべき言葉がない。大法は聞ける日に真に聞けと、増田さんが言つてる氣がする。誠に聞かれる日に真に聞くこと。誰も彼も何も彼もそれを語っている。永劫久遠に亘つて時間の無窮を思う時、さびしいさびしい心となる。しかしながら、一度この無限の時に於て生を人界に享け、唯一絶対の正法に遇いたるを思い念仏する時、この身の幸の思われることではある。世の人、皆、眼前の小事に囚われてこの大事を知らず、解脱の道を求めず、如来の廻向に生きず、宿善なき限りこれを如何とすべからず、これを思う時、貴女が言うようにさびしいことではある。せめて我等は一生かけて正法を聞き本願道に終始させて頂こう。今年後五時来診、心臓衰弱甚だしく如何とも手の下しようなきようなる言葉尻である。噫、遂に絶望なるか、可愛想に。針を立てられても痛み等訴えずとのこと。御正忌にはモソペをはいて台所で働いていたのに。今本部は沈痛の底に沈んでいる。これがとどく頃には……………御念仏申そう。御念仏のみが人生の全てであることが痛感される夕べである。あなかしこく

昭和十七年三月二十日夕暮

夜晃

松中まさる様

(六十)

合掌 南無阿弥陀仏 承りませば御尊母様には御養生も叶わず御仏のみくにに御急ぎになりましたとのこと驚き入りました。御一統様の御悲しみ、さこそと御察し致します。御老母には生前長い年月、私の話も聞いて下さって御念仏によつて結ばれました間のこととて、ひとしおさびしく存じます。御貴下様にも近頃は御弟様は名誉の戦死をおとげ遊ばされたとのこと、又先般は叔父上嫌が御逝去なされ、御子様は御病気なされ、重ねくの御不幸で思つただけでも心が痛んで来ます。御本人の御心如何だろうと時々皆と御うわさ致しております。しかしこれが如何とも出来ぬ人生の真相であります。どうすることも出来ない生死海の相であります。唯御念仏の中に受け取らして頂きましょう。それより外に道のないことでもあります。有漏の業風はふきすさび、苦悩の波浪はうづまきましようとも本願の大船は此難度海を度する大船であります。いよいよ念仏に生きさせられることは亡き母上に対する最上無上の孝道の御成就であります。何卒念仏一道にいよいよ御精進下さいますように御願ひ致します。

この手紙も何日にも書きましたのでおそくなりました。私も病の床にいますが輕いのですから御心配下さいますな。ふじえ様もよくこそ二年間塾において下さいました。人手の少ないことですから御帰し致しますが、講習には出して上げて下さい。よい子が本部を去つて皆さびしがつています。

ではお悔みまで、皆様によりしく御伝え下さいます。

昭和十七年四月九日書 夜晃

栗栖実様

(六十一)

合掌 南無阿弥陀仏 御母上様が御浄土に急がれて定めし悲しかったことでありましょう。本部にいて悪くなつて御介抱することの出来なかつたふじえさんが一番母上の死を悲しく思つたことでありましょう。死目に会えたか知らとそれのみ心配してありますが未だにわかりません。どうか間に会えばいいが、誰も彼もそればかり心配しました。毎日時々貴女のことを思い出します。ふじえさんも亦毎日本部のことを思っていることでありましょう。

そしてその度に御念仏申していることでありましょう。本部を思い出してもお母様を憶念しても、それがすぐ御念仏となつて下さるあなたを嬉しく思います。そして

それが亡き母上に対する孝道であります。念仏一道にいよく御精進なさい。お母さんのことを思うとさびしいことでありましょう。若いむねに悲しいさびしい思いをさせることがつらく思われましたが、どうすることも出来ない人生の実相であります。人生の実相を知つていよいよさびしく悲しければ悲しいほど大悲のみ親の御心にかえり念仏させて頂きましょう。私の病は悪くはありませんから御安心下さい。時々あともどりしてこまります。平田星へよろしく言つて下さい。しつかり兄上や姉上の御手伝いをして又講習には出してもらいなさい。皆待つています。いづれ退塾式には出て来ることでしょうから。同封の為替は僅少ですが母上の御霊前へ御供へ下さい。さよなら。

昭和十七年四月九日

夜晃

栗栖ふじえ様

水谷の山々は美しく春のすがたに輝いていることでしょう。

(六十二)

一、本日は御手紙有難う拝見仕り候。此方のこと御心配下され御心づかい尊く有難く頂戴仕り候。本日まででもどうやらこうやら、やりくり候こと同朋の御懇志の賜に御座候。鶴枝さんの膏血を頂戴して相すまぬことに御座候。御礼申上候。

師世いよく衰弱致候とのこと、心を暗く致候。可愛想のことに御座候。噫。噫。如何ともならざるものか、一度大きい父ちゃんが見てやりたく候。何卒全力をつくして命を取とめるに懸命となり下され度候、師世にもわかるように「よい子だ、よい子だ」と御伝え下され度く候。

一、君も亦病床とのこと、各種のクランケにとつて生き苦しき梅雨期に御座候。一流のがんばりを顕示相成度候。

一、小生の病も甚しく緩かには候も漸次減退致居り候間、御安心下され度候。昨今は毎日毎時囚はれ居り候。検出法もあまりやらす、総合的長期戦の形をとりおり候ところ、久々にて昨日もエスバツハ氏の分もズルホも微量に相成居候故、此分ならば八月聖会までには全快致すやも知れず候。四五年も前からの歯槽膿漏等歯の治療に通つたり、選挙に出かけたり、夕方は海の方まで散歩致す等、少しは動き居り候、御安心下され度候。

一、雲がくれ致され候聖軸二揖御出ましなされ候こと芽出度候。はや島に御帰りなされ候や、未だ安野に御座候や。あの直後書きかけ候手紙にはそのことを第一に書きたるものに候も、氣力なく途中にて其のままに捨てられたるものに候。本日は是非最後まで書くべく候。

一、四月よりこの方、女塾中心に病床法話を続け居り候ことは御聞きの通りに御座候。一週間は一年生に予備的話をなし、それより後は本願成就文を語りおり候。今此

頃は「聞」の字につきて如実聞と不如実聞との簡別に御座候。本部のこの頃は誠に実に有難く、念仏の香も豊かに御座候。病氣故に帰られぬことを気毒に存候、本年春入塾の子も大概は有難い子に相成候。

一、南無阿弥陀仏（以下三月以後市内土曜会にて観経を語るその最初の方）

①観経には何が書いてあるか。一口に言えば正法を聞いた者は幸にして正法を聞かざるものは不幸なることが書いてある。（同経をよく一貫して頂かれたし。この一句を一日心にとゞめて御咀嚼なされたし。）

②然れば正法とは何やぞ。答えて曰く、正法とは仏心、いいか、仏心、おんころろを知らしむることである。御心だよ。御心とは一切の概念化も、抽象化も、律法化も許されぬ御心、円き熱き真実の御心を衆生の骨髓に徹せしむるのが正法である。然り、正法とは仏心の開顕である。而して仏法とは大慈悲心である。真に真身觀の「仏心者大慈悲是」とは観経の眼目である。然るに今日の一凡俗もこれをかくの如く知り得るに善導已前の学匠たちがこの一事を知らず、天台智者大師を初めとして皆然り、今日観経をかくの如く頂戴出来るもの、全く善導の賜である。もし已上の一事にして明かならざれば観経は全く聖道智者の為の經典と見ゆるに至るなり。

何となれば、斯経に於ては先仏の依正二報を説き、又凡夫を示す。仏は凡に非ず、凡は仏に非ず。この価値的に相反する二者は、ついに念仏の境に於いて一如一体となることを示す。仏凡を一如一体たらしむるものは大慈悲なり、大悲は仏によつて発起し、救済を成就する能力ありといえども、しかも一如一体たらしむるところはあくまで凡夫の心想事成に入ることを示す。もし一度誤つて観経の言を見んか、直ちにあまりにも直接せる心中開顕の大信は聖道の開覚と誤まらる。善導已前悉く然り。喩えば諸仏如来法界身、法界とは他師に於いては真如界、随つて法界身とは理法身に外ならず。

然るに大慈悲の宗教にては法界とは無辺の生死衆生界に外ならざることは御存じの通りなり。誠に斯経に於いては仏の大慈悲を開闡したまうのである。生きたる御心にふれさせて頂くこと、心！心！御心！御心そのまゝ念仏となりたまう。大慈悲によつて衆生心中に於いて、仏凡一体となりきつたところを流通に至つて念仏一つと示されるのである。かるが故に大慈悲即念仏なり、念仏の全てが大慈悲なり。

観経は念仏一つを説ける経なりとは古来の聖賢の正しい領解であつた。「正法を聞くものは幸なり、正法を聞かざるものは不幸なり。」

一、然るに「斯経に於いては、心を説くよりはむしろ相を説き、以つて觀を成就すべきことを示せるが如くなり、以つて云何となす。」かく言わんとするものは、先ず真身觀を開け、而して静かに文に聞け、（瞑目して暗誦したまへかし）

「無量寿仏有二八万四千相一

一、相各有八万四千随形好（好とは相の微妙なるをいう）

一、好復有八万四千光明

一、光明徧照十方……………撰取不捨」

我、不明にも、かゝる尊き含蓄ある聖句をこの度病となるまでこれを頂かず、去る日これを誦すること幾十百度、不可思議なる感銘を得たり、

相、好、光、念仏、撰取。

感銘を得たるは、光とは御心なるが故である。果せる故、次に文にあり、

以觀仏身故、亦見仏心 仏心者大慈悲是、

以無緣慈、撰諸衆生

光明撰取とは、仏心撰取、大悲撰取なり、相の極、御心に徹せしめんとするは斯經の面目なり、然るに先ず相を説けるものは、衆生に於いては相を重しとなし、相によつて心に入り、心を相に見んとするが故なり。相好に依つて心に徹せよ、仏心を領解したるものにとつては、相はそのまゝ心である。

一、念仏一つ、念仏一つにてこと足ることを示すは流通なり。汝念仏一つにてこと足れりや。この一句は全ての人を深い内觀へとつれて行くであらう。汝の生活にして念仏一つにては足らぬ日あらば、そは必ず見失われたるものあり。曰く、大慈悲である。

一、經の序分に於いては、人生の現実を、業苦を、複雑多なる流轉の具体相を示しつつ、「多」とは云く、人生の現実なり。「現実のままにては助からず」と云いて、多を無視せる一（聖道的二乗的世界）は頭だけのものなり。日本主義を語るもの皆、一億一心を語る。その多くは多を無視したる、斬り捨てたる一なり。現実流轉の多のまを捨てずして一を転成して、業苦を念仏一つの中に受け取つて具体的に生きる人を分陀利華と言ふも宜なる哉。我等かくの如き人をこの眼に見ることを得。幸なる哉（以上にて第一日おくべし）

一、深奥先生約束通り、二年にてこの六月二十日頃、内地に帰られる由、会うこと6を得るは嬉しきことなり。大森忍も上森一郎も大概は法に飢えて本部に来る。客のたえたることあまり御座なく候。佐々木ちさ子、肋願炎にて病床、絹も二三日虫歯に化膿で七度三分、今頃本部には、看護婦の森本さん、槇林夫人等あり、七月例会はいよいよもとの如く、八月の聖会も然り。黄だん後、心臓衰弱をおこしたのが町原夫人に候、用心肝要早く御全快相成度候。 早々

昭和十七年六月十七日

夜晃

蘇晃様 鶴枝様

(六十二)

合掌 南無阿弥陀仏（二行略）……………

念仏一つ。御念仏一つが私のすべてです。貴女のすべてです。他のものは私のもののようにもいづれ私のものではない時が来ます。本願の名号だけがまことに私のものである。お名号だけがたった一つの真に私のものである。何故ならばお名号は大悲本願の御成就だからであります。たとえ西に日が出て東に入る時があるうとも、お名号だけが私の身代の全てであることがよくわかったのが信心であります。貴

女の身代は本願の名号だけであります。そして本願の名号は功德の大宝海であります。

病む身にとつては何も仕事はありません、苦しくない時はお念仏申させて頂くこと、久遠劫来の業苦が今、病の因となつて居るのです、しかしこの煩惱のかたまりは大悲光明の中にいけどられて居ます。

汝、念仏一つにてこと足るか。よくよく考えて見ることです。念仏一つでこと足りませく。その時病の床は愚痴のさびしいところではなくて、嬉しい感謝の光に、つゝまれた有難い道場であります。

お念仏申しましょう。お念仏は三千大千世界一ぱいにひろがつて居ます。恒沙の諸仏は総だちして護念証誠して下さいます。お念仏申しましょう。生きる死ぬるを越えて今日一日念仏させていただきましょう。

お会いしたいと存じます。毎日御念仏の中にお会い致しましょう。

昭和十七年六月二十五日

肥川八重子様

夜晃

(六十四)

合掌南無阿弥陀仏（旅先にて用紙もなくペン書き、平に御許し下さい。）

この度、奥様には、思いがけなくも急に御浄土に御還りなされ、何とも申し様も御座いません。徳山にいます間、こんなことになろうとも思わず、御見舞にも出ななだことを悲しくも悔いて居ます。十六日十七日には、誠に一時も忘れることが出来ず、どうか十八日朝までがん張つて下さいと思いつけましたのに、十七日夜半御逝去の電報を頂きまして愕然として打ちのめされ、悲しみと相すまなかつた、残念だ！誠に何とも言えぬ衝撃を受けました。

たつた一人御残りになつた貴方の御さびしさを思います。私は誠に相すまぬことでありましたが、同胞たちに、念仏によつて守られて、この世をお去り下さつたことはせめてものなぐさめです。

奥様の求道の最初から、今日まで、ずっと因縁の深かつた私は、その御心の進み方、御精進のほどあまりによく存じて居ますので、毎日、「ようこそ精進して下さいました。貴女は尊いお方でありました。よくこそ、教えに忠実に生きて、み仏のましますことを身を以て御示し下さいました。」と心の中で毎日々々ささやきます。死の床にありつつ念仏によつて死線を超えて下さつた。長い御一生ではなかつたけれども、尊くも有り難いご一生でした。その点では御悲しみの中のせめてもの御よろこびかと存じます。

どうかこれから念仏道に御精進下さいませ。奥様は御浄土から、今はみ仏となつて見守つて下さりつつ、そのことを念じつづけていて下さることあります。同胞から御様子は毎日承つて居ました。その病中の一語一語は皆千万金であります。私の心

に有難くも頂戴致しました。目のあたり色々と御聞きになり御覧になった貴方には、日を経るにつれて感慨無量のもがおありだろうと存じます。どうかその度に御念仏申して下さいませ。多年御病気ばかりなさいましたが、奥様は貴方の御慈愛と念仏によつて幸福でありました。有難う御座います。

謹んで御弔意を奉白致します。

昭和十七年九月廿日

住岡夜晃

藤井久南様

(六十五)

合掌 南無阿弥陀仏

御手紙有難く拝見致しました。急な思いたちで徳泉老僧にこの世の御別れにゆきましたので、知らせる暇もなく失礼しました。しかし、よう残念がつてくれました。私が徳泉寺に行つたのについて非常に残念に思つてくれた人に、貴女と光善寺の母丈との二人があつた。会いたがつてくれる人には、私も亦会いたい。み仏様は会わして下さるであろう。たとえ、別れてもお浄土では必ず別れることのないことにして下さる。私は近頃しみじみとお浄土で会える人でないとこの世でもまことには一緒ではないことを痛感しています。国に一人か郡に一人かとの言葉を思い出さずにはいらぬ。多くの人があるようでも、年月がたてば、一人か二人かになつてしまします。不退の位ということを強く説いて下さつた聖人のみ教の有難さの思われることでもあります。いよいよ忠実に本願の御意にかえり、今日一日念仏の一道を精進させて戴きましよう。

次に、九月の末頃、例の人が本部に来て例の問題を話した。しかし私は何とも言わずにおいた。それは私が許すとか許さぬとかの問題ではない。ひとえに貴女の大問題である。それでよくよく考えて決すること。人の話では、○○さんも結婚するよりも、○○ちゃんが今に大きくなるのだから、あれに養子でもされた方がよからうと言う。辛苦が今よりも増し、御法を聞くのにも今の方が楽であるかも知れない。

しかし、貴女の心の中に行つた方がよい、ゆきたいという心があれば、又格別です。わからぬことがあれば、相談にはのるが、よく考えて決定することです。駅で会わんだかわりにこの手紙を差し上げます。

昭和十七年十月十七日

夜晃

三浦恒代様

(六十六)

合掌 先日はお手紙有難く頂戴致しました。相変わらず御精進の御事、嬉しう存じます。私も蛋白が一寸多くなつたので何処にも出でず、内で御法を頂いています。今によくならうから御心配下さるな。

この度の風水害、本部も相当やられました。整理やら復興やら皆かかっています。が、なかなかはかどりません。本月六日から江州本覚寺が来て毎日労働を続けていてくれます。左官に土を渡したり、破損箇所を大工のかわりに修繕したり。かげながら拝んでいます。私の病氣、増田きさよの死、この度のこと、事に出会っては人の心の種々相を知らされました。水につかつて汚くなつた書物の表紙やら、整本やら、五六冊すれば日が暮れる。しみじみとももの御恩のしのばれる秋ではある。

噫、二乗、枝葉の末に色や香のこぼれている秋には、この尊き、目に見えぬものの、相對の上にこぼれるということのない二乗の相が悲しまれる。

十月六日出発、七日に徳泉寺とこの世の別れに行きました。胃癌と胃かいよう。

もつたいないと泣きます。モヒで痛みをおさえて一夜を十月の例会で頂いた自然法爾章（十一月もつゞく。出来れば御出席あれ）を語り更した。「死を感じて」と題して「おちてゆく無間の其処も里の春」と書いて渡してくれた。今も机上にそれがある。あわれ、その夜はあれほど元氣であつた老も昨十七日午前六時御浄土に帰つた。

悲しけれども芽出たしく。昨日も今日も老遺愛の香炉に終日香をたいて、「二十二人目の善知識よ」と一生叱らせてくれた彼をしのぼう。

この頃つくづく思うこと、お浄土で会われる人でないならば、この世でも真には会つてはいないことを。別れても別れぬ人。希有人とはこの人のこと。俱会一処の9文字が私を喜ばせ私を悲しませる。騒々しい雑音と共に全てが過去の夢となる。講習に出たことも大法を聞いたことも。その時消えぬ念仏一つが今日の命となり、教えの数々が日々新たに現実の中に蘇る人が幾人あろう。人は正法から去る時は威勢堂々と去る。

念仏申せ。死ぬるぞく。それを思う時、往生浄土の御本願の有難いこと。浄土は永遠の真生活、その永遠に生きる人のみに人生も亦意義を持つ。

御大事に御精進なさい。

昭和十七年十月十八日

樗部不二様

夜晃

(六十七)

合掌 心臓が悪くなつたとのこと心配しています。今絹家が外出しているので、御手紙私が対を切りました。助願が悪いと聞いていたが、それなら何時ものことと思つていた。どうか弟の心臓よ強くなれ。又一つ私の心に思い続けることが増してきました。

秋作が膝関節の下に腫物を出し、それを島の副院長に切つて貰つてずんずん痛くなり、十八日頃島に入院、蜂力織炎をおこしたのですが、昨日頃もうずつとよくなりまりました。お知らせしておきます。絹家は今それに行つたのです。今年は荒れる年。

胃潰瘍と癌にて、すでに病重しとの事にて六日出発、七日徳泉寺に着きました。激痛をモヒにて抑え、大法をお伝えしました。私が室に入つた時は、合掌して勿体ないと言き入りました。幸にその前も悪く、その後も悪く、中三日ほどよかつた時で、十月例会の自然法爾章を語るに一時半位は床上に起きて聞きました。老僧、死を感じてと題して「おちてゆく無間の其処も里の春」と一句を書いて渡しました。八日、帰団。十日、田所講座。哀れなる哉、悲しい哉、十七日老僧大往生。医師は一ヶ月乃至三月と言つたのに（九月下旬）それよりも早く死に至る。腹が膨張してもいず、嘔吐もないので、一般胃癌の如く当分はもてると思つたのに。毎日老師を喪つて悲しんでいます。しかし本年七十一才、幸福な人だつた。有難く喜んで喜んで死んだんだ。

近頃「往生浄土」の本願のよろこばれることだ。そしてお浄土で再会の出来る人になければ、この世でも真に会つてはいない人であることが痛切に思われる。その人は極めて希であろう。一筋の一筋の純な淳な大悲に相応する心のみが、死の聖関をくぐつてお浄土へ通る。味い給うべし。味いたまえかし。南無阿弥陀仏

今朝、下関の竹中さんから、有難くも尊い御便りを頂いて涙している時、市長より、本日十時御下賜金拝受に出頭せよとのこと。驚愕に近い感銘を抱いてこの便を書いている。不徳な私に対して平等の慈悲ならこそ、今佐々木君が出頭している。

本月六日頃から、江州本覚寺は御手伝が出来ないからとて、身を以つて奉仕、泥土をねるやら左官に渡すやら、毎日毎日すでに十数日、蔭から拝んでいる。私は何をどうしても江州にはゆく。今も階下から槌の音がしている。その一つ一つが身にしみる。

二十日から五日間、夏の島根、山口の講習の議題を本部の者に聞かしている。福山から橘高、羽原、島から大磯、三人出席している。しかし残念がるな、いづれ聞かせから。

荒堀がついた。畳が今十四枚配給があつた。畳が五円六円七円の三通りで、六十何枚これが金が一番だろう。紙がないので障子がはれないから階下には住めない。十二月の聖会までに完成すればいいがと思つている。

九月下旬、あの沢山な書物が十畳一ぱいに散つているのを三日がかりで本箱におさめた。なかなか私にはひどい労働だつたので、蛋白が多くなつたようだ、それで静養と思つて本月は家にいる、しかし体そのものは元氣だから御心配無用。

十一月も自然法爾章だが決して無理をしないこと。弱い心臓にもしかのことがあつてはならぬ。必ず、何時か聞かせるから無理をすな。

今の所、金のことは心配しなくてもいい。修理の間に困るような事があれば御助けを願う。如来廻向の智慧は、必ず二つのものを一具に内具する。わかつたと、わからぬと、光と暗と、願作仏心と度衆生心と、よろこびと悲しみと、等々、信心の智慧に似て、この二相を内具しないものは智慧ではない。得ていよいよ得ぬことを知り、わ

かつていよいよわからぬことを知る。汝の聞法精進人を感動せしめざるは、利他度衆生を内具せざるが故なり。汝の念仏のよろこび空疎にして人を動かさざるは、悲しみを具せざるによる、得たと思うは得ざるなり、得ぬと思うは得たるなり。

南無阿弥陀仏を聞いて一切あることなし、故に念仏のみ真実なり。如来の大悲は、我一人が為なりけり、ということと「念仏は一人いて喜ぶ法なり」ということと、この二つが欠けた御信心は死の前には通らぬぞく。

今日はこれでおく、又体がふくれるであろう。

ふくれたのが、へること（二種内具）ではあるが、いづれ遠からずゆくよ。林様によろしく。鶴枝さん毎日く御苦労です。御念仏申して下さい。師世は元気になつたかね。いづれ御役に立つ、気をつけて大きくして下さい。では病状を、時々知らせてくれ、あなかしこ。

昭和十七年十月二十一日

住岡夜晃

蘇晃殿

（六十八）

合掌 南無阿弥陀仏 先日御足労で御座いました。定めし御安心で御座いましたよ。三国一の婿がねを因縁によつて得られた御幸を慶祝しないではいられません。その節は体の具合が悪くて御意に随うことが出来ないで残念でした。御許して下さい。

又此間は御事の多い中に災害見舞ども頂戴致しまして誠に相済まぬことでした、有難う御座います、厚くく御礼申し上げます。

校長よ。私は近頃つくづく思います。お浄土で御会いさせて頂くと云うことの有難さを、そしてお浄土で御会い出来る人でないならばこの世でも真には御会いしてはいないことを。私はあまりに多くの人とお会いした、そしてあまりに多くの人とお別れました。その人の中で永遠に別れることのない人がいくばかりであろう。希有人とはこの事である。

徳泉老は遂に十七日に大往生をとげた。毎日この人の死を悲しみつゝ、よろこんでいる。

校長よ、何時もく私のこと、本部のことを衷心から思つて下さつて有難う。人になりきる、人の身の上になりきつてあげる心を持つていない私の心の相を凝視して悲しんでいる私には、特に今我が運命に同じたまう心に合掌せざるを得ない、御志のほど念仏申さずにはいられない。

二十日より六日間、ある島根の講習を小さく本部員中心に再現しています。二十一日の昼席、夜席（其夜本部泊）二十二日昼席まで藤川の母丈と春枝さんが聞きに来られた、さつき帰られたばかりである。今、厭苦縁の話の途中である。夫人は世尊の威重なるを、小縁の為に請ずることを卑謙の心によつてつつしみ、阿難と目蓮の来らしめられんことを求め、ために世尊、夫人の「心念之意」を知つて靈山の大衆をおい

て夫人一人の為に王宮に來りたまう！ 一人のために！ 一人が為めの宗教ここにはじまる。出かしたり韋提、その悲痛なる願、大聖世尊を動かしたり。弥陀の五劫思惟の願を……佐々木清一郎は如来の一人子なりと。一人子になつていないで、人とならんでいたら、まさかの時には間にあはぬぞく。

大経から云えば一切衆生は皆如来に念じられている。しかし觀經から云えば、如来を念ずるもののみ如来に念ぜられる。私を慕つて下さる人のみが私も亦慕わしい。(中止)

今日は二十四日で大変寒い日であります。今、韋提の別選所求、弥陀浄土一つを自選したところまで語りました。信彼所願随心自選。いよくくという時、何を随心自選するか、念仏一つの世界の至難と易行とを思うことではある。

二十一日午前十時、半壊家屋の名義にて畏くも救血御下賜金を市庁に於て頂きました。御もつたいないことでもあります。様々なことが思われます。毎日み心の有難さに泣くことでもあります。御恩徳のみであります。

今日はこれでおきます。でないとな誰か来ると又延々になりますから。蛋白は少しは減りました。風邪が治つたので体は元気です。御心配下さいますな。

小春夫人先日は御足労で御座いました。はあちゃんの前途に念仏道が開けたことは有難いことでもあります。氷や雪が来さうになると、郷里を思い、聖人をしのびます。お大事に。

昭和十七年十月二十四日

夜晃
12

念仏の校長御夫妻御中

(六十九)

(本文略)

昭和十七年師走十一日

夜晃

原田勝三様御待史

追伸

生死の大海を超えるとは善悪の世海を超えさせて頂くことであります。「善悪の二字知らざる人は誠の人」とは聖人の仰せであります。我等はすでに善悪を知っています。善悪を知っているが故に流転の海にあります。善悪のみを言ひつゞけている自分を見て生死の海の我を知るべきであります。我のみがものを言っている時は善を自分につけ悪を人の上に見て苦しんでいます。自ら善悪の悪を知り、人の上に善を見、尊さを拝む時、心は広い世界に出られる様であります。よく我が心に愚悪を信知するもののみ、善悪を超えさせて頂きます。超えた時、如来弘誓願船上にあります。

むしろ、この大悲弘誓大船上に救い上げられるが故に、善悪の世界を超えることが出来るのであります。

本部では、十一月二十二日、私が山から本部に帰った日から聖会に皆様をお待ちする心の仕度として「和」を成就させて頂く為に十七条憲法の第一章と第十章とを頂きました。善悪意識のもつれこそは和の敵であります。今日一日念仏して和を成就させて頂くこと、思えば幾万幾十万の英霊もこの「和」の一字の為に献じられたのではないか、今日一日念仏して和の心を頂き、先ず一家の中に和を成就させて頂きましよう。

尊い年も暮れます。和の心で新しい年をお迎え下さい。あなかしこく。南無阿弥陀仏

(七十)

合掌 南無阿弥陀仏

向寒の砌と相成りましたが、その後、皆様如何御精進なさいますか、御伺い申し上げます。若奥様も未だ御全快なさいませぬ由、心配致しております。この度は信子様をよくこそ講習に御出し下さいました。(四行削除)又其節は御心づくしの数々念仏合掌して頂戴致しました。

お蔭様にて台所は大変助かりました。家内からも山々よろしく御礼を云つてくれと申し伝えました、誠に御厚意のほど有難く謹んで御礼申させて頂きます。本部にも二三日前から左官が来て便所台所等の修繕を致しております。この上、大工が来てくれましたら、全て出来ることで御座います、御安心下さいませ、目下は商家は大変事務が複雑にて御繁忙とのことではありますが、どうか御多忙の中にも御念仏申心に御精進下さいませ。そしてもう長らく御会い致しませんので一度でもお会いしたらと思えます。御正忌にでも教育部会にでも必ず御来会下さいませ。御待ちしております。

先は御礼まで、寒さにむかいますから皆様御大事になさいませ。敬具

昭和十七年十二月十四日

住岡夜晃

肥川庄次様

追伸

一、御念仏の尊さが香らなくなると自力我慢の悪臭が自他を傷けます。今日一日お念仏を申して為ることのみが生きております。

一、信は願となります。願こそは信の相であります、清浄願往生心が無くなったのは信がなくなつたのです。願は内に、欲は外に求めます。至純なる願の一道に立つて己を忘れませぬように。

一、己の上に悪を見、人の上に善を拝む心の持ち主は、「和」を成就する人であり、以和為貴のみ教を頂いて、先ず一家の和を成就して大御心に報じ奉りましよう。

一、聞かれぬ日には、聞いたみ教の一句でもかみしめて大悲のみ心に帰り、お念仏を忘れぬこと、お念仏はまん円い如来の御徳の全てであります。
一、大地に合掌して愚禿と名告り、地獄一定と言われた祖師を忘れず、邪見憍慢な我心を知らせて頂くこと、雪を見れば、祖師の忍従を思います。皆様今日一日念仏申しましょう。

御一同様

夜晃

(七十二)

合掌復呈 その後おvariなく御養生の趣安心致候も、師世の病患誠に可愛想に御座候。

愈々、年末おしせまり一年間の百千万の転変の波、念仏の一点に統一随順せしめられ、本年こそ一入念仏道に於いて恵まれたる年にて候。あれより後、両三回念仏常会をも催し、本部員二同張切り居り候。特に二十一日よりは各年末の覚悟、新年を迎ふるの自覚に於いて、いよいよ大精進の旬間に入り申し候。二十一日夕の法話はこの覚醒に就てに御座候。昨二十日は、誠に悲報に接し申し候。文理科こと、中松里三君の戦死に御座候。年末覚醒の大音と相成申し候。我は今ふとも大音と申し候。大音とは何ぞや。如来正覚の大音に御座候。噫、何すれぞ如来正覚の大音の悲痛なる。念仏申せの大音の悲痛なる。念仏申せの大音の悲痛は、衆生累卵の危きにあつてそれを知らず、それを知らざるが故に正覚の大音を聞かず、聞かざるが故に、知らざるなり。

実に真実の道は、この循環論法の上に立つ。我等はその昔、如何にこの循環法を軽蔑せしことか。されど真実の道は循環の論法に立つ。然るが故に先ず如来は循環論法の不可思議なる権仮方便の道を示して、衆生を純熟調御し導入したまうなり。因果律の上に立脚する相対差別の法に何ぞ循環論法あらんや。循環の論理なくして何ぞ難信の法とならむ。極難信たるは全くこれが為めなり。この事筆紙の盡す所にあらず、能く之を思念せよ。

「念仏申せ」とは正覚の大音に御座候。されど信なき衆生にあつては、蚊の鳴く声ほどにも響かぬことに御座候。昏々として無明の深夜に眠れるが為に御座候。然るに世には念仏申せの一言を以つて、超世無上の大浄音と受け取り、称有の覚醒と無上の喜びとを感得する人有之候。そは実に第十八願正定聚の機、本願一実無上絶対の自覚に至り、一見矛盾撞着の循環論を一如に体解したる人、即ちこれ二種深信に御座候。

祖聖は真心徹到と仰せられたり、念仏申せの仰せ、この教命を外にして真心徹到あらむや。念仏申せの教命に於いて真心徹到を体感せられたる祖聖の大自覚、仰ぐべき哉……限りなければここに擱筆することに致候、聞きたければ本部の夕の勤行に参進せられたし矣。

希くば君も亦歳末精進の旬間に入られたし。精進とて外なし。この大音を聞くことに御座候。依つて速達を以つてこの書を送り付仕り候。この書後に必要あり、御返却を乞ふ。南無阿弥陀仏

昭和十七年師走二十一日

蘇晃君へ

夜晃